

冬春山麓居詠抄

石川 國 武

山の上に御來光見むと待ち居しに大きな雲たちはだかれり
いきほひて雲表に出づる太陽か峰々の線描き出だせし
驛頭にたちたる友の瞳のなかにたまゆらうつるは街の灯影か
星どちの光を止め山頂にかゝらむとする月のさやけき
凍みらへる山頂の雪青皓く輝きをりて寒さ厳しき
星もなくてしんと冷へゆくこの夜半僧房の灯は氷るかに見ゆ
佛壇に灯ともしかしこみおろがます老母の髪黒きを數ふ
戦場の砲煙さながら吹きまくる砂風がなかにわれも銃とる
吹きおろす風のなからに照準は定めたりしが指うごかさり (査閱)
武に散りし遺骨迎ふと人らみな眼は輝やかざるよ黙しならびつ
消え残る雪をみつゝも來し野らは日さし和めど風しみならなり
雪解せる畦のこどへもぬくもりて落の藁はや蒨へ出でにけり
籾竹の葉末になごむ陽をはじき吹き和めるは春風ならし

になるのである、今では店でも一番古い方でこの頃は大方出張して歩いてゐるので店に居る事も少ないそうである、今こそ立派にやつて居るが兄としてはその間には随分苦しい、つらい思ひもしたであらう。同じ様に働いて居る者の全部は皆が背負面目な者ばかりではない、それとなくありもしない事を悪く主人に告げる様な不心得の者も居たのであらふ。

「一層の事店を出てしまはうと、新宿驛迄行つた事も幾度かあつた、併しその度ごとに考へなほしては又店に歸つた」と兄は云つてゐた。今迄よく苦しみに打勝つて來たのだ、私は兄の姿を思ひうかべながら元氣で居て呉れ、ばい、がと……、汽車はごうくと走り續けて居る、窓の景色は次々へと變つて行くが私の頭には兄の事より外には何物もなかつた、一層途中下車して兄さんに會はふかしら……とも考へたがどうしても都合悪く又の機會にしようと思ひ止めた。それでも窓へ顔を出して、もしや矢崎といふ店は見えないだらうかと一生懸命に

玄土をもたげし芍薬の芽はのびず春は滞るさむさとなるも

土堤の上に立てばうらけしたまゆらをひばりあがりて位置さだまりぬ

庭立ちの梢あかるきさみだれやはれきわさむくけぶるひとゝき

晝たけて深山しづけし観佛を説く聲きこゆ杉のむかふに

神さぶる老杉むらに雫して時雨すぐるか陽すじ射し込む

狭庭邊の笹の葉すでにかけれども暮るゝこともなし春の陽さしの

修學旅行

老松のかけは並びて廣重の畫に似し湖の面は光りぬ（濱名湖あたり）

岩の面は潮にひかりて反射ありカメラ向けつゝしばし撮さず（二見ヶ浦）

神さぶる森がなからに鳴きたちて東天紅の聲はひどかふ（伊勢）

摩訶般若波羅密多心經誦し奉る僧四人眠氣きざしくこの太子講はや（法隆寺）

削げ落ちし柱にふれていにしへの伽藍のさまにおもひ及べり

古さびし斑鳩宮居仰げとて夕陽むなしもかげろふ菖

三條小銀冶雷避けの太刀みまもるに思ひおちゆく

大佛結坐しゐます建物のなかにわれたち遠き世をおもふ（奈良大佛殿）

しづかなるみ庭の池に石置きてこゝ金閣の松の夕暮（金閣寺）

外を見まはしたがそれらしいものもわからなかつた。

大宮邊から雨になつた、汽車は人家を離れて稻や桑の眞青に續く關東平野を何時迄も走つてゐた、熊谷でお茶を買はうとしてホームへ出ると外は風もあつてひどい雨だつた。

日英會談はどうなるだらう、大部分の人々はそれらしい話で色々語り合つてゐた私は相手もなく一人で雑誌をひろげて讀んでゐた、高崎より信越線と分れて單線になる、妙義、榛名、赤城の山々はいづれも雨の爲にかすんでゐた、汽車は平野をはなれ段々山の中へ入つて行く様な氣がする、川が汽車に沿つて流れる多分利根川の上流であらう、川のふちには枝ぶりのよい松が青々と繁り水は川の底まではつきり見える程澄んでゐて實に美しい、きれいな眺であつた、私はこの何とも云ひ様のない景色にいつ迄も見とれてゐた。

水上、奥利根の温泉を見る、大ていの旅館は皆避暑客でこんでゐる様であつた。こ

杉幹のおちゆく窓にわれは居てケーブルカーは比叡を攀づる
遠方きまに帆舟うかべるうなばらは琵琶湖にあらしひろびろしかも（山頂より遠望）
みつるぎの鎮ちもりませる宮居にてすめらをこの武運を祈る（熱田神宮）

生活煩惱

辰 巳 紫

兄 渡 満 す

滿洲にゆく汽車ぬちに書けるこの兄の歎きにふるゝ心地す
大陸の土ふまへたりと書き出しの文字はきほひて紙背に透る
我よりは意志つよき兄とおもへども異國のたつきいかにあらむ
盛んなる心とのみは受けとれず海越へ來たる兄の便りに
大陸の土となるとも悔いずとふかたき心は放ちたまふな
老らくの身にしたつきを負ひませど長兄が事ほめて云はしぬ（父母を訪ふ）
ひさびさに母を訪へば老らくの微笑はいたくわれをなかしむ
常ならぬ世といふからに零落の生活はも父が慣れしとぞ宣る
うつろなる笑みなるからにふと見れば父の瞳に光るものありき

の邊は相當の高きにあるので夏でも大變涼しく避暑にはよい場所であるといふ、いつしか雨も止んでゐた、水上の驛では降客も多かつた、電氣機關車に替へる爲大分停車時間があつたので私は外に出た、風は冷たかつた、いかに高原といふ風な感じである。

清水トンネルに入る、汽車は後にゆくにつれ段々に曲つてゐた有名なループ式である、しばらくしてトンネルを抜けると今入つて來た所が左の窓よりすぐ下に見える。

越後へ入るともう天氣はすつかり晴れて午後の日はいやといふ程暑く照りつけた。

越後平野に入る。海岸と思はれる方は一面に松林が續いてゐる、彌彦山を遠く望んで汽車はどこ迄も續く稲田の中を新潟へ向つて走つてゐた。（中三）

故郷の夜

井 上 龍 榮

晝間の暑さに比べて夜は、すこし寒さが